

Monthly Report

2年ぶりに海浜実習を開講～山形・由良海岸で再開～



大遠泳終了後の記念撮影

7月14日（金）から17日（月・海の日）の3泊4日の日程で、海浜実習が実施されました。昨年度は諸事情により、やむなく実施を見送った海浜実習も、開学50周年を迎える本年、再び山形県鶴岡市・由良海水浴場を舞台に開講することができました。庄内の温暖な気候と対馬暖流がもたらす絶好の海水温は、本学海浜実習の新たな船出を歓迎してくれているかのようでした。

実習前は些かな不安げな表情を見せた実習生44名も、それぞれの技能レベルに応じて着実に練習を積み、日を迫うごとに自らの水泳技能が向上していくのを実感していた様子でした。気象・海象コンディションを鑑みて、予定を前倒しした大遠泳本番は、前日までとは打って変わって序盤から横なぐりの雨とうねりを伴う海の状態でしたが、実習生は練習の成果を遺憾なく発揮して乗り切り、終わってみれば1時間58分、1人の脱落者も出ることなく無事に完泳を果たすことができました。

最終日は、海浜における安全教育のひとつとして着衣泳を実施しました。水辺のレジャーなどで、不意に足を滑らせて、着衣状態で落水した場合を想定して、当日は、白山島の港の灯台（高さ2.5m）から飛び込んで浜まで戻る体験型学習をしました。

着衣状態で落水するとどういう感覚が体を襲うのか、着衣はどれほど泳ぎに影響を及ぼすのか、着衣状態で浮いて救助を待つにはどのような方法が良いのかなど、学生は体にまわりつく衣服に四苦八苦しながらも、それぞれに工夫をしながら水とうまく付き合う方法を学んでくれたことと思います。

今回参加した実習生にとっては、生身の肉体ひとつで海に繰り出す4日間は、改めて自然の驚異に触れた時間だったと思います。温かく穏やかな海が、ほんの少しばかり牙を向く瞬間、自然の力の前には自らの力など遠く及ばないことを知り、自然に向き合い、いかにして共存するか、大海原の中にあるのは、孤独ではなく仲間との一体感であることを知り、無事に泳がせてもらった全ての事物に感謝することを学んでもらえたなら幸いです。

最後になりますが、本実習の運営にあたっては、全学的にご支援とご協力賜りました。朴澤泰治理事長・学事顧問にはご多忙中にもかかわらず現地にて実習生・補助学生に激励いただきました。また、実習生を快く受け入れてくださった由良地区関係者の皆様も合わせまして、海浜実習の運営にご協力いただきました全ての皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

【報告：講師 渡邊 泰典、写真提供：教授 小松 恵一】

〈目 次〉

・2年ぶりに海浜実習を開講	1
・「仙台大塾」開講式を開催 ・一日学科体験会報告	2
・校長就任祝賀会開催 ・文科省「情報ひろば」で取組み紹介	3
・新企画！ 「プレイルームから、こんにちは」 ・学内アスレティック・トレーナー・ プログラム認定証授与式を開催	4
・ソチ五輪代表の黒岩選手が三重県の 小学校で講演	5
・2017NATA年次総会参加報告	6
・南條教授がキワニスクラブで講演	7
・卓球部の学生が上海体育学院での 卓球サマースクールに参加	8
・上海市の幼稚園を視察 ・開学50周年記念事業 第3回心池会杯争奪剣道大会開催	9
・ウエイトリフティング部が活躍 等	10

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224-55-1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

今年も「仙台大塾」が開講されました

7月25日（火）、LC等を会場に「放課後先生『仙台大塾』開講式」が開催され、阿部芳吉学長や船迫邦則柴田町教育長、柴田町内の6つの小学校から約180名の児童などが参加しました。

開講式冒頭のあいさつで阿部学長は「皆さんが分からない問題などは、教員を目指す学生の皆さんがサポートしながら教えてくれます。わからなかったことが分かるようになるよう頑張って勉強してください」と挨拶。また、参加する児童を代表して船岡小学校6年の中森歩夢君からは「仙台大学の素晴らしい環境の中で勉強して学力を向上させたいです。このような環境を作ってくれた仙台大学の皆さんや、柴田町のみなさんに感謝しながら学習に励みたいと思います」と立派に仙台大塾に臨む決意を語ってくれました。

この事業は柴田町内の小中学校に通う児童・生徒を対象に行われている「柴田町トップアスリート事業」の一環として開催されたもので、子どもたちの個性や能力を導き自らの夢実現に結びつくよう、学習の定着を図るための支援活動を目的としています。今年は8回の開催が予定されており、児童たちは本学が用意したバスで通いながら、教員を目指す本学学生42名がサポート役となり、夏休みの宿題などに取り組むことになっています。



「仙台大塾」開講式の様子

学科一日体験会を開催 ～子ども運動教育学科からの報告～

7月9日に、子ども運動教育学科での初の「学科1日体験会」が開催し、飛び入り参加も含め35名の高校生と16名の同伴者の方々にご参加頂きました。

体験会では、講義と実技そして施設案内（保育ルーム、保育実習室、ピアノ室）を実施しました。実技では、学生が考えたレクリエーションを実施し、講義で緊張していた高校生の表情が和らいでいました。保育ルーム見学では、子どもと実際に触れ合ったり、遊具を体験して頂きました。参加者は、学内で子どもたちと接する機会があることに驚いていましたが、保育ルームでの時間をとても楽しそうに過ごしていました。

また、ピアノ室見学では、学生によるピアノ演奏を披露しました。担当した学生は、緊張したのか、ところどころ間違えたりもしましたが、かえって場が和み、ピアノが苦手な高校生からは「ピアノが弾けないと入学できないと考えていた。自分も頑張れそうだ。」などの意見を聞くことができました。参加者は、学生から入学後のピアノ練習のサポートについての説明を受け、入学後のイメージを掴んでいたようでした。

本学科は今年度より開設された為、1年生しかおらずに籍者も18名と少ないなか、補助学生として14名が参加してくれました。それぞれが自分の役割を把握し、猛暑の中、一生懸命運営に携わってくれました。そのおかげか、終了時間前には高校生と学生が楽しそうにコミュニケーションをとる姿がみられました。本学科は他の保育者育成校とちがい、男子学生が多いので、今回ご参加頂いた男子高校生も安心した様子でした。



【報告：講師 山梨雅枝】

第18回「校長職就任祝賀会」 第7回「宮城県、仙台市新規採用教員激励会」を開催

第18回「校長職就任祝賀会」第7回「宮城県・仙台市新規採用教員激励会」が7月29日（土）、ホテル白萩（仙台市）で開催され、朴澤理事長・学事顧問、阿部学長始め同窓生や本学関係者60名が校長就任と教員新規採用を喜び合いました。

今年度は第14期生の熊谷浩先生（柴田町立西住小学校）、第16期生の及川功次郎先生（美里町立南郷中学校）、第18期生の加藤敏充先生（七ヶ宿町立七ヶ宿中学校）の3名が新たに校長職に就任されました。また、宮城県、仙台市の教員として16名が新規採用され、今回9名の先生方が出席しました。

朴澤理事長・学事顧問の挨拶、阿部学長の祝辞があり、久能教授（元仙台市小学校校長会長）からは学校経営と教員としての心構えなどについての激励の言葉があり、乾杯ののち恩師や出席者の皆さんとの懇親が和やかに行われました。

校長職に就任されました3名の校長先生方からは大学時代からこれまでのエピソードや校長として新たな気持ちで学校経営に取り組んでいくとの決意が述べられ、また新規採用された教員の方々からは仙台大学出身者としての自覚、誇りを持って、何事にも積極的に励みたいとの抱負が語られました。

それぞれの先生方の挨拶の後、針生教授の「伊達の一本締め」、そして校歌斉唱、万歳斉唱で3時間の盛会を終了しました。

【報告：同窓会事務局長 大河原 則夫】



今年度校長職に就任された3名の先生方

文部科学省「情報ひろば」で被災地支援の取組みを展示



「情報ひろば」に展示されている本学の取り組みを紹介するポスター

文部科学省は、平成20年1月の庁舎移転を機会に、国民との双方向コミュニケーション機能を強化する取組の一環として、登録有形文化財となっている旧文部省庁舎を活用し、「情報ひろば」が整備されました。平成28年度に大学・研究機関等との共同企画として、企画展示をする団体の募集があり、本学も「体育大学による被災地での健康支援」というテーマで応募し、16団体の一つとして採択されました。

東日本大震災発生直後より本学が宮城県亘理町、女川町、美里町の避難所や仮設住宅の集会所において実施してきた、廃用症候群予防やコミュニティの再構築を目的とした健康支援活動について

の展示を行っております。今回の企画展示を通じて、本学の学生たちが中心となり、被災者の心に寄り添って続けてきた活動を県内外の方々に発信し“被災地の今”を知っていただく機会になればと考えています。東京に足を運ぶ機会がありましたら、是非お立ち寄りください。

展示期間：平成29年7月27日（木）～平成29年12月21日（木）

開館時間：月曜日～金曜日 10時00分～18時00分（入館は17時30分まで 土日祝は休館）

展示会場：文部科学省情報ひろば「企画展示室」 ※入場無料
（東京都千代田区霞ヶ関3-2-2 旧文部科学省庁舎3階）

【報告：新助手 齋藤 まり】

「プレイルームから、こんにちは！」

2016年4月にスタートした「プレイルーム（預かり保育ルーム）」。
このコーナーでは、知られざるプレイルームでの子どもの姿や学生の
学びについて皆さんにお伝えして参ります。“はじめまして”の今回
は、仙台大学が独自に取り組む預かり保育の概要をご紹介します。

【対象児と定員は？】

本学の教職員、社会人学生のお子さん（1歳～2歳児）を10名までお
預かりしています。

2017年7月現在、9名が在籍しており、1日平均7名が利用していま
す。

【設置場所は？】

LC棟 1Fプレイルーム（保育実習室向かい）です。

【開室時間は？】

平日のAM8：00～PM5：30です。

【職員の体制は？】

保育担当職員（保育士資格保有者）1名、保育補助職員1～2名（曜日
によって異なる）、学生アルバイト1名で対応しています。

上記のような内容で、福利厚生、学生の学びの場、研究対象とする
ことを目的として、預かり保育が運営されています。4月から子ども運
動教育学科がスタートしました。学生は、授業や自主的な学びのため
にプレイルームに足を運んでいます。初めは子どもとの距離の取り方に戸惑い、意思の疎通ができないこと
に葛藤する学生ですが、共に身体を動かし、遊具の面白さを共有することで心を通わせていきます。また、
テキストに載っている身体の発育発達を、目の前の子どもの動きで確認することで理解が深まり、保育実践
に飛び出す前の学生にとって貴重な学びの場になっていることがうかがえます。子どもも、職員のみならず
お兄さん、お姉さんが一緒に遊んでくれることを楽しみにしています。

今日も、プレイルームに元気な子どもの声が響きます！次号からは、子どもの遊びの様子を具体的にご紹
介していきます。どうぞ、お楽しみに！！

【報告：准教授 柴田 千賀子】



プレイルームで遊ぶ子どもたち（上）
夏は水遊びでも楽しめます（下）

第1回仙台大学・学内アスレティック・トレーナー・プログラム 認定証書授与式を開催

7月26日（水）本学A棟2階大会議室にて、アスレティックトレー
ナー（以下AT）分野では初となる、学内アスレティック・トレー
ナー・プログラム（IC-SUAT.P=internal certification to Sen-
dai Univ. AT Program）認定証書授与式を開催いたしました。

本プログラムは初級・中級にレベル分けされ、規定の講座・実
習・検定試験を修了した者が、学長から認定証書を授与されるも
のです。プログラムの目的はATとしての基礎的な知識・技術の習
得を促し、各レベルにおける活動範囲を明確化し、学習意欲を向
上させる事などになります。平成27年度から2年間AT部の学生
を対象に試験的に実施を重ね、今年度に入り学外医師1名ならび
に学内AT有資格者3名の審査を経て、阿部芳吉学長から正式に学
内資格として認定されました。

今回は平成27年度・28年度実施分の合格者、IC-SUAT.P初級15名、IC-SUAT.P中級15名、合計27名の学生が
認定されました。式の中で学長から学生に向け、激励のお言葉をいただきました。「本日こんなに多くの学
生が式に参加し、驚いている。残念ながら、日本ではまだアメリカのように全ての高校でATが働いていると
いう状況は出来ていないが、将来絶対にそうなるときが来る。皆さんはさらに上の資格を目指して、がんばっ
てください。」IC-SUAT.P中級代表で証書を受け取った体育学科4年河野祐輝は「今回の結果をステップアッ
プとし、日本体育協会AT試験合格へ繋げたい」と語っています。

平成29年度の講座等の実施は、改善点等検討しつつ後期から開始する予定です。ユニークで魅力的な大学
を作り上げていくという視点から、今後関係者らはプログラムの改善・継続・新しいアイディアの模索等に
尽力する必要があると思います。

【新助手 鈴木 のぞみ】



三重県津市立桃園小学校で「夢を叶えるために」と題し ソチ五輪 オリンピアン 黒岩俊喜さん(大学院修士課程2年)が講演



2013年12月にNHK番組「アスリートの魂〜最速エンジンになる ボブスレー黒岩 俊喜〜」と題した初のオリンピック（ソチ五輪）に挑むドキュメンタリー番組をご覧になったことがきっかけで、4年間に渡り交流が続いている三重県で梨農園を営む村澤さんご一家と6月13日に、今回初体面を果たしました。

当日は駅のホームまでご家族みなさんで温かな出迎えをしていただき、手作りの応援旗を持って到着を心待ちにしてくださいました。

そのあと、村澤さんのお孫さんが通われている小学校において「夢を叶えるために」をテーマに講演を行ってきました。

前半はオリンピックの開会式や閉会式、オリンピックでの滑走、パブリックビューイングの映像を流しながらボブスレー競技の紹介や体験談を語りました。映像が流れ始めると児童が笑顔と驚きの表情で食い入るように画面を見つめながら「速い」・「カッコいい」などと話していました。どれも児童にインパクトのあるものだったとは思いますが、その中でも際立ったのは、全員の心が一つになり全力で応援してくださっているパブリックビューイングでの映像で、一段と児童の心に焼きついたようでした。

後半は、夢について自身の体験を交えながら話しました。私は小さいころから「テニスで世界に出たい」、「陸上競技で金メダルを取りたい」等、様々な夢を追いかけてきたのですが、その中で共通していたものが「オリンピック」でした。今、その夢のスタートラインによりやく立てたことを話した後に、児童の夢を聞いていきました。みんな様々な夢を持っており、先生やお医者さん、スポーツ選手といったものからユーチューバーなどたくさんの夢を聞かせてくれました。

実は今回、私が夢を聞きながら驚いたことがあります。それは今まで行ってきた講演会とは比べものにならないくらい手を挙げて自分の夢を語ってくれる児童が多いことです。残念ながら授業時間の関係もあり全員の夢を聞くことはできませんでしたが、これほど多くの児童が自信を持って自分の夢を語ってくれたことは、講演をさせていただいた私としてはとても嬉しいものでした。

最後にその夢を叶えるために私が行っていることを話しました。それは「夢に向かって努力する」・「感謝をする」・「自分のことが好き」・「自信を持つ」の4つです。児童の皆さんが夢を叶えるために少しでも私の講演が役に立ってくれば良いと思います。

【報告：仙台大学大学院2年 黒岩 俊喜】



手作り応援旗で出迎えて下さる村澤さん



素直で元気な子ども達と小学校で

2017 NATA年次総会参加報告

6月26日（月）から同月30日（金）の期間、アメリカ合衆国テキサス州ヒューストンで開催された National Athletic Trainers' Association（以下、NATA）年次総会に内野洋材新助手と遠藤皓樹新助手とともに出席しました。NATA年次総会は、毎年6月末におよそ40,000人の会員数を誇るNATAが主催するアスレティックトレーナーの学会兼関連企業の展覧会です。総会内でのイベントは様々あり、出席者は各々が興味を持つ内容の講座やワークショップなどに出席し、アスレティックトレーニングに関する最新の研究結果や知見を学ぶことができます。

年次総会出席者の主な目的1つに、資格更新のための Continuing Education Units（以下、CEU）の獲得があります。NATA公認アスレティックトレーナーの資格は、2年に1度更新しなければならず、更新のためには50CEU（50時間相当の学習）を獲得しなければなりません。年次総会に出席し、講座やワークショップなどに出席することで、その内の多くを獲得することができます。

また、現在は移行期間ですが、NATA公認アスレティックトレーナーの資格を取得するためには、大学院修士過程を修了することが条件となります。その流れの中で、アスレティックトレーナーは Evidence Based Practice（以下、EBP）が強く奨励され、研究データや調査結果をもとにした現場での活動が求められています。50CEUの内、10CEUはEBP公認プログラムから獲得しなければならず、今年の総会から、その公認プログラムとされた講座がいくつか設けられ、有資格者たちはこれらの講座に出席することで、EBPにおけるCEUの獲得ができるというシステムが実施されていました。

次に、出席者の大きな目的の1つにネットワーキングをあげることができます。総会へ出席することにより、同窓生などとの再会ができるだけでなく、Career Centerを通して就職活動をしたり、District Meetingと呼ばれる、活動地域内に所属するアスレティックトレーナーのネットワークミーティングも多く開催されていました。日本人



盛り上がりを見せていた関連企業の展覧会

有資格者で構成されている Japan Athletic Trainers' Organization（以下、JATO）のミーティングも開催され、日本人有資格者同士での繋がりを構築する良い機会となっていました。そのミーティングでは、今年から新しく会長に就任した植松氏により、JATOにおける新しい存在意義が掲げられていました。JATOは、NATAとの正式な提携を結ぶ組織として認可されたことで、NATAとの間でより精力的かつ活発に日本でのアスレティックトレーニング普及に向けて活動をしていく決意を表明していました。

学会と同時に開催されている、関連企業展覧会も盛り上がりを見せていました。200以上もの企業が、それぞれの専門性のもと、最新技術を駆使した商品のプロモーションをおこなっていました。もし、気に入った商品が見つければ、その場で購入の契約をすることも可能であり、有資格者たちも新しい商品に興味を持ちながら、プロモーターたちの話に耳を傾けていました。

他にも、全米各地の大学院生が実施した研究の成果を発表するポスタープレゼンテーションのブースが設けられていたり、Free Communicationとして学生たちが有資格者たちからアドバイスをもらえる場所が提供されていたりと、アスレティックトレーニングの将来を担う学生たちのサポートがしっかりなされていました。

数年ぶりにNATA年次総会に出席することが出来き、とても良い刺激となりました。旧友と共にアスレティックトレーニングの将来を語り合い、また日本人アスレティックトレーナーたちの活躍を目にしたことで、今後の自分のアスレティックトレーナーとしての展望を考えさせられる良い機会となった。今後は、今回の総会で学習してきたことを活かし、仙台大学への教育に還元して行くとともに、個人の研究をより深めていきたいと思ひます。

【報告：講師 高橋 陽介】



NATA年次総会の様子

南條充寿教授が仙台キワニスクラブで講演 「リオ五輪を戦って ～2020東京五輪への挑戦～」

7月13日（木）、仙台キワニスクラブの招きにより、南條充寿教授（仙台大学柔道部総監督・仙台大学柔道塾塾長・前全日本柔道女子監督）は仙台国際ホテルにて「リオ五輪を戦って ～2020東京五輪への挑戦～」と題した講演を行い、25名もの会員の方々が熱心に耳を傾けました。

キワニスクラブでは活動の一環として、毎月2回講師を迎え講演会を開催しており、例会委員長で産経新聞東北総局長である白濱正三氏の依頼により昨年4月に阿部芳吉学長が「いじめについて考える」という講演を、同11月に鈴木省三統括副学長が「アンチエイジング戦略」という講演をそれぞれ実施し、大変好評だったことから今回のお申し出となりました。

最初に南條教授は「日本柔道はオリンピックにおいて、より輝きの良いメダルをとることが至上命令です。日本の柔道界がさまざまな不祥事を経て困窮していた時に、恩師である亡くなられた斎藤先生から自分が全日本柔道女子監督に抜擢されて以来、ともかく選手達にオリンピックでメダルを取らせることだけを大目標として、必死に取り組んで来ました。みなさんはスポーツに対して華やかなイメージを持つでしょうが、実は日本は学校体育と企業集団に支えられています。国がオリンピック選手への経済的な支援をはじめとした手厚い保護を確立している他国の例と違い、Team JAPANとしてオリンピックの選手に選ばれたとしても、各選手が各企業に所属しているという日本独特の難しさがあり、柔道の現場でコーチングするよりもむしろ、強化選手の選考及び強化計画の「立案」「実践」「評価」、海外の現状の情報収集、所属との関係強化といった選手達のマネージングをすることがメイン業務でした。」と話されました。

オリンピックにおいて柔道は、男女7階級あるなかで1日1階級、軽量級から試合が始まりますが、かつての谷亮子選手や野村忠宏選手など、いわゆるスター選手はいずれも日本が最も得意とする軽い階級の選手です。しかし接戦の結果が1歩及ばず、最も欲しいメダルのないままに5日目、南條教授がセコンドとして唯一帯同する田知本遥選手が70kg級に挑戦しました。

14名の代表選手のうちのただ一人、これまでのオリンピック、世界選手権大会でのメダル獲得経験がなく、強豪選手が1番多く存在する階級にいる田知本選手が一戦一戦勝ち上がり、最後に見事金メダルを手中におさめるという劇的なドラマがあったのは記憶に新しいところですが、その直後、南條教授が最初に田知本選手にかけた言葉は「おめでとう」でも「よくやった」でもなく「あまり調子に乗らぬよう、、、ここからがお前の評価のスタートだぞ!」と予想外の一言だったそうで、南條教授のなんともユーモラスなお人柄に、会場は笑いの渦に包まれました。

次に、2020東京五輪までの課題として南條教授はまず、柔道人口が減っている現実を警鐘をならしました。前出した谷亮子選手に代表される誰もが憧れる、目標とされる選手が現在は存在しないという危機感。新聞・テレビに代表されるマスコミともっと連携し、スター選手の発掘・育成の必要性を説きました。また、暴力事件を



講演する南條教授

発端とし、中学校で武道が必修化された時期的タイミングが合致したことにより、保護者の方が「柔道は危険だからだめ」とこどもに勧めなくなった現実を指摘して、柔道界のイメージアップが急務であることを述べました。

今後、世界で戦うためには日本人の強みである「高い技術力＝段階に応じて掘り込む作業ができる」能力をさらに強化させ、選手一人では決して勝つことができないTeam JAPANとしてのサポートメンバーの充実、ナショナルトレーニングセンターを活用することで卓球やバドミントンのように世間一般へアピールすることも重要な要素だそうです。

また、指導者への待遇について、南條教授は諸外国との違いについて話し「仙台大学の教員でありながら、監督に就任したらほとんど大学にいたことができず、多大なご迷惑をおかけするであろうことは承知の上で、“全力を出してやってきなさい”と力強く背中を押して下さった朴澤泰治理事長・学事顧問（当時は理事長兼学長）に、心からお礼申し上げます」と謝意を述べました。

キワニスクラブ会員のみなさんは、リオ五輪から約1年が過ぎた今だからこそ、冷静にオリンピックという世界最高の祭典を振り返り、その時だけ熱中してメダル獲得を連呼する日本独特の空気についても国全体として反省・改善が必要だと思われたようです。

会員の1人で株式会社東芝の東北支社長・谷内聡（たにうち さとし）氏は「柔道は日本のお家芸と一言でいうにはあまりに困難な、知られざる現状を南條先生が率直に語ってくださったことは目からうろこが落ちる思いです。日本の会社としてその時だけ選手を支えるのではなく、長期的な視野でもっと企業同士が連携し、自国開催のオリンピックのあり方を根本から考え直すべきではないでしょうか？大変勉強になりました。」とおっしゃっていました。

2020東京五輪・パラリンピックに向けて、柔道をはじめとした次世代のオリンピック選手の輩出に、仙台大学はますます真摯に取り組んでいくことを伝える貴重な場となりました。

卓球部の学生が上海体育学院卓球競技サマースクールへ参加

2017年7月5日～8日2日、仙台大学の国際交流締結校である中国上海体育学院において、卓球競技のサマースクールが行われ、同学院の朴美子教授の研修派遣依頼に基づき、本学から卓球部所属の現代武道学科1年生の奥田大喜さんが参加しました。引率教職員は、朴澤理事長・学事顧問（7月16日～19日）、馬佳濛准教授（7月16日～23日）でした。

本プログラムは、卓球を通じた国際交流を発展させることを目的に、上海市当局の支援の下で上海体育学院が主催しており、主に上海体育学院と提携している海外の大学に対して、一大学当たり2名までの招待により実施されています。プログラムの内容については、メインを卓球練習とし、そのほか中国語、中国書道、茶道、伝統切絵、雑技の鑑賞などの多彩な文化体験により構成されています。

本プログラムの実施に関わる使用言語は中国語および英語となり、派遣学生に対しては事前に中国語の指導を行いました。言葉の障碍に心配がありました。しかし、本人の積極性と真面目さで、20数ヶ国からの参加者と意欲的に中国語でコミュニケーションを取り、プログラムの参加や日常生活に支障が出ないほどこなしていました。また、各国留学生とともに寮生活を行い、普段の授業から日常生活まで、深い友情を築きました。中盤からの現地引率となりましたが、本人がすっかり現地の生活に慣れていく様子を見ることができました。上海体育学院卓球学科の顧楠講師からは、「彼は、卓球の練習も中国語の授業もとても真面目な姿勢で取り組んでいるので、上達が早い。また、性格がよく、周りから大変好かれている」と高評価を頂きました。本人は「中国での卓球修行は前から望んでおり、この機会を得ることが大変な難い。この機に、さらに中長期の留学を考えたい」と熱く感想を話しました。短い期間ではありますが、卓球大国の本場での指導を経験できることは、卓球に対する理解をより深めると



ともに、中国卓球の精神と技能に触れる機会となりました。

以上から、本プログラムは、参加学生にとって学んだ内容を活かし将来に役立てられる知識・経験等を得る良い機会であると確信するとともに、卓球授業の単位互換を含めた長期留学制度の導入など、今後、上海体育学院卓球学科プログラムへの参加をより体系化していくことが仙台大学の学生教育にとって有意義なものとなることを確信しましたので、是非、実現したいと考えております。

本学50周年記念事業の打合せに関しては、朴澤理事長と馬准教授は、上海体育学院の陳院長をはじめ、朴准教授、国際センター長の戸教授、および、11月の50周年記念行事の学生パフォーマンス引率者の楊珏准教授と会談し、朴澤理事長からは、院長自ら50周年イベントに参加されることに対する御礼の他、パフォーマンスに必要な設備・照明などについて説明し、引率者と内容確認を実施しました。陳院長からは、招待に対する御礼と、今後両校の交流がより一層発展することを願うとの話がありました。引率者の楊君准教授は、国家級新体操競技選手を経て舞踊関係分野の指導者となっていますが、具体的なパフォーマンス内容および必要な設備関連について確認がありました。今後は、先方の要望を踏まえて準備を進めていくこととしました。

上海体育学院と仙台大学とは、これまで大学院留学生受入・交換留学、教職員間の交流を行ってききましたが、今回の学生の短期研修派遣は初めてであり、今後も本プログラムへの参加を継続させ、中・長期の単位交換留学制度の実現など、さらに交流を拡充していくことを確認する出張となりました。

【報告 准教授 馬 佳濛】



中国・上海市の幼稚園における幼児体育への取組みを視察

7月17日～21日にかけて、中国の幼児体育や幼児教育の動向把握のため、中国上海市の幼稚園を視察しました。本学からは、朴澤理事長・学事顧問、金講師が参加し、菊池さん（仙台大学の卒業生・上海体育学院博士課程進学）に幼稚園を案内していただきました。

視察前には、日本幼児体育学会会長の前橋 明教授（早稲田大学）と共同研究を行っている上海体育学院の陸教授から、上海の幼児体育の状況についてレクチャーも受けました。

Shanghai Ruihong 幼稚園は、上海市の中でも、富裕層が住んでいる地域にあるため、子どもが生活しやすい環境が印象に残りました。とくに、園内の施設には、バランス系の遊具が並んでいるほか、多様な種類の運動あそび器具が多く配置され、子どもがどこでも手軽に運動あそびができる環境が素晴らしかったです。しかし、運動プログラムは、ほとんど園内で実施しており、それは、中国の大気汚染（PM2.5）との関連があると説明を受けました。また、園長先生と幼児体育指導者との中国の「子どもの身体活動ガイドライン」、「幼児肥満」、「生活環境や習慣」など幼児体育の観点から活発な議論を行いました。



今後、中国の幼児のみでなく、中国に在住している日本幼児にも、家庭の環境・社会の環境により、肥満児の増加や自立性・社会性の低下が予想されますので、日・中比較調査の必要性があると考えました。

この他、上海滞在中、複数の保育・幼児教育関係施設の視察も実施しましたので、今後の子ども運動教育学科の教育研究の運営に役立てていくことにしております。

【報告：講師 金 賢植】

仙台大学開学50周年記念 第3回心池会杯争奪剣道大会を開催

7月29日・30日の両日仙台大学剣道部心池会（OB会）主催の第3回心池会杯争奪剣道大会と第4回心池会剣道練成大会が仙台大学で開催されました。これまでの大会は会場を分散しての開催であったが、今回は仙台大学開学50周年記念大会として開催され、第五体育館を利用させていただきました。当日は、小雨模様の中、参加校高校35チーム・中学校40チーム出場（430名）と、引率教員、OB、学生、保護者を含めると約600名近くとなり、大学の広い会場は熱気と気迫に包まれました。中学生・高校生にとっては、新チームに移行してから初の公式試合となるため、公式戦初出場の選手や、新しいチーム作りを考える監督たちにとっては、絶好の大会となりました。また、同一会場での開催となり、中学生・高校生が互いの試合観戦ができたり、運営する側も移動や伝達等がスムーズに行うことができました。

大会終了時には、OBによる稽古会や懇親会も開催され、久しぶりの再会と道場での稽古に学生当時を懐かしく思い出されていました。さらに、仙台大学の学生にとっても大会の運営や、審判技術の実践練習の場として貴重な二日間になったと思います。最後に、立派な大会会場をお貸しいただいた大学、準備等にご尽力いただきました大学関係者や学生の皆様に感謝申し上げ、ご報告とさせていただきます。

【報告：平成13年卒 宮本 亮】



大会の様子

ウェイトリフティング部 東日本インカレで活躍

7月7日～9日まで埼玉県上尾市スポーツ総合センターで第45回東日本大学対抗選手権大会が開催され、本学ウェイトリフティング部から5人の選手が出場しました。試合会場には、阿部学長、高成田部長が駆けつけ熱のこもった声援を送っていただきました。69kg級小川 純選手（運動栄養学科4年ー山形県・鶴岡工業高校出身）がトータルにおいて6位に入賞（スナッチ種目102kg 6位、C&J種目128kg 6位）を果たし、昨年の同大会に比べ11kgも記録を更新しました。

105kg級保科魁斗（体育学科2年ー宮城・村田高校出身）は、全6試技に成功しトータルで7位に入賞（スナッチ種目116kg 8位、C&J種目158kg 5位）しました。今大会の結果によって小川（山形県代表）、保科（宮城県代表）の両選手は、8月に秋田県三種町で開催される行なわれる東北総合体育大会への出場が決まりました。

85kg級大谷 祐希選手（スポーツ情報マネジメント学科3年ー宮城・柴田高校出身）は、入賞を果たせませんでしたでしたが、大会前の自主トレーニングの成果が実り、クリーン&ジャーク種目で125kgに成功、4kg自己記録更新となりました。94kg級大津 恭輔選手（体育4年ー宮城・石巻高校出身）は、全6試技に成功しC&J種目の3本目に146kgを成功させて自己記録を1kg更新した。同階級の菅野有真（現代武道学科3年ー宮城・塩釜高校出身）は、トータル222kg（スナッチ種目102kg、C&J種目120kg）を挙上し、昨年の同大会に比べ34kgも更新しました。団体順位は、9位（16点）となり、個人、団体ともに昨年（11位6点）以上の結果を残すことができました。

【報告：ウェイトリフティング部 監督 新助手 壹岐 優】



C&Jで128kgの挙上を成功させた小川選手

平成29年度新任者紹介(7月5日付)



たかの のりゆき
高野 典之さん
(入試創職室長)

7月からお世話になっております。未経験の仕事ですが、微力ながら学生の皆さんの入試、就職のお役に立てるよう精一杯頑張りますので、ご指導、ご鞭撻よろしくお願いいたします。

2017オープンキャンパスが開催されます

毎年恒例となっているオープンキャンパスが今年は8月5日（土）に開催されます。

オープンキャンパスでは教員志望の方への特別講義やキャンパスツアーなど、仙台大学を実際に「見て」「聞いて」「知る」ことができる一日になるよう様々なイベントをご用意して皆さんをお待ちしています。



昨年のオープンキャンパスの様子

速報 「第23回夏季デフリンピック競技大会 サムスン2017」で 佐々木琢磨選手(陸上競技)と星泰雅選手(水泳競技)がメダル獲得！

佐々木 琢磨 選手（新助手・平成28年卒）
陸上競技 男子 4x100mリレー 優勝
(日本新記録)

星 泰雅 選手（体育学科1年・東北高校出身）
水泳競技 男子4x200m自由形リレー 第2位
男子4x100mメドレー 第2位
男子4x100mメドレー 第3位